

社会人学生を経験して

北條 浩

Experience as a Working Graduate Student

Hiroshi Hohjo

1. はじめに

当所には、人材開発の一環として、海外および国内の大学・大学院への留学制度がある。ねらいは体系的な専門知識や最先端の技術を備え、将来の核となる一流研究者・技術者を育成することにある。

筆者は1995年4月～1998年3月の3年間、当所で研究業務をする傍ら、国内留学として名古屋大学大学院工学研究科博士後期課程に在籍する機会を得た。研究テーマは「窒化けい素セラミックスの微細構造と強度特性に関する破壊力学的研究」で、以前に当所で行ってきたテーマをより学術的に掘り下げ、今後、複合材料等の新素材を開発していく上での微細構造の設計指針として構築・応用しようというものである。

本稿では、社会人学生を経験した際のエピソードや感想を述べるとともに、最近の大学事情について触れる。

2. 大学でのエピソード

筆者の在籍した研究室は幸いにも出身講座であった。宮田隆司教授（材料強度学）を筆頭に、講師、助手、秘書が各1名、博士課程3名、修士課程11名、4年生7名、研究生1名が在籍する総勢26名の大所帯（'97年度）である。その内、留学生は3名で、国籍も中国、韓国、アルゼンチン、と多彩である。少数のスタッフで大勢の学生を指導しなければならないため、必然的に上級者が下級者を指導することになる。筆者も1、2名の修士、4年生を指導しつつ、自分の論文をまとめていった。

研究室では、歓送迎会、忘年会、夏の講座旅行、高校生向け講座紹介など、大学ならではの行事が

多々ある。社会人であるため旅行に参加することはできなかったが、歓送会や忘年会に顔と寄付金を出すことはできた。宴会では学生らのワイワイガヤガヤの中で学生時代に戻ったような気分を味わえる反面、ジェネレーションギャップを痛感した。若い学生たちと酒を交わすことは硬化しつつある脳にとって良い刺激になる。

また、研究を進める過程で、材料の破壊の確率・統計論を習得する必要性が生じたため、何度か学生らと勉強会を行うこともあった。大学には常に基本に立ち返る余裕と場があり、研究で行き詰まった時に解決のヒントを得ることができる。時には学生の柔軟な発想がヒントになって現象の解明につながったこともある。例えば、長い亀裂の開口変位の測定結果が理論値と一致せず考えあぐねていた時があった。この時は、試験片の負荷履歴が影響していないかとの学生の指摘が的中し、後の解析に結びつけることができた。

3. 最近の大学事情

筆者が在籍した時期はちょうど大学院の改革が行われている時期であった。工学の高度化と多様化に対応するため、質的・量的に研究・教育の高度化と充実を実現させることを目的として、研究・教育の中心を学部から大学院に移行する組織改革（大学院重点化）が進められていた。名古屋大学ではこの改革を'97年度に完成し、従来の学科の枠を越えて複合的・横断的に発展させた新しい分野の研究を促進する「複合専攻群」が設置された¹⁾。しかし、専攻が増えても教官の数はそのままであるため、教官の負担が増え、研究・教育の質の維持が難しくなるという問題が生じてい

る。この点では、筆者のような社会人学生は教官にとってありがたい存在であったと言える。

また、ベンチャービジネスの起業、創造性教育など、21世紀の工学を担う技術者・研究者の教育のあり方が検討課題になっている。これらの課題のほか、現在多くの大学が抱えている課題は、教員の任期制導入、設備の老朽化対策、インターンシップ制度の導入、少子化対策など、山積みである。

4. おわりに

国内留学で得た専門知識を研究業務に如何に役立たせるかは自己実現にもつながる重要な課題であると認識している。学位授与式での工学科長の

訓辞では、21世紀の科学技術の中樞を担ってほしいとの期待が述べられ、社会的責任も重大であることを痛感した。

大学の先生が研究の先端をリードして行けるわけは、学者としての資質以外に、学生に講義を行うことによって常に基本に立ち戻って考えることができる点と、学生たちと接することで若さを保つことができる点にあると言えるのではないか。基本を大切にし若さを保つ努力を続けながら仕事に励む今日この頃である。

参 考 文 献

- 1) 名古屋大学工学研究科ニュース PRESS e, No.3(1997)



晴れの卒業式での一コマ